

雪しろき奥嶺があげし二日月

藤田湘子

太陽が沈んだ夕暮れの雪嶺のすぐ上に、利鎌より細い二日月が輝く。

この天地の間には、自分と雪嶺と二日月しか存在しない。俳句で詠えるものは少ない。否、少ないからこそ詩として浄化して俳句となる。

そこには、自分を中心とした目に見えない三角形の図形さえも浮かび上がる。

元号が変わると年齢は数えにくいものだが、湘子先生は大正十五年一月十一日生まれ。すなわち、昭和元年と同年なので明瞭。作句時は、数えで二十二歳。

水原秋櫻子の主宰する「馬酔木」入会後の初巻頭句となった。

1947年（S22作） 第一句集『途上』 鑑賞・轍郁摩